勧進僧に関する考察

川勝政太郎

一、序言

わが国の平安時代以降の仏教信仰に関係する遺品は、全国に数多く遺存している。それら遺品の調査研究は歴史考古学の重要な職能であって、遺品の形態・様式・分布などについての考古学的な研究、または遺品に刻まれた銘文についての金石文学的な研究も、年を追うて進められている。

これら多数の遺品は、それぞれ願主（施主）があって、彼らの信仰生活の反映として仏教信仰遺品が造られたのである。その工作に関しては専門の工人に作らしめるのであるから、当然願主はその費用を負担するが、このような仏教的作善を行うことを、願主が自発的に決意する場合があるとしても、多くは作善を勧奨する第三者がそこに介在した。

この作善をすすめる行為を勧進とよぶ。本来仏教の勧進とは、人をして仏教信仰に入らしめることを勧奨するものであるが、費用を支出して作善を行なうことをすすめること、すなわち経済的な負担によって作善が遂行されることを人に説く勧進僧があり、その勧進に応じる人が願主となるという関係が成立する。

このような勧進を行なう者は、多くは僧侶であって、勧進僧・勧進聖（ひじり）の名が用いられる。僧侶でない神主や俗人が勧進を行なった例もあるが、普通は僧侶である。ここにはその人たちを総括して勧進僧として述べて行く。

仏教信仰にもとずいて作られた歴史的遺品そのものは、われらの祖先の残した貴重なものであることはいうまでもないが、その作善の発願者とそれを勧進した人たちの活動した実態を明らかにすることも、また歴史の一面を追求するために必要なことである。この小論においては勧進

僧に限って考察を加えたいと思う。なお発願者に関する一つの論文は、本学論集第四号（昭和四五・一一）に発表するところがあった。（注）

（注）川勝「中世における石塔造立階級の研究」

勧進ということについては、今までの仏教史関係の書物や論文にしばしば取り上げられているが、その多くは平安時代における「市聖」の空也、「皮聖」の行円、永観、良忍、高野山などの念仏別所の聖を通じて述べられている。それらは文献による研究または民俗学による成果によって論じられたものである。しかるに前記の通り仏教信仰遺品は全国的に数多く遺存し、その中には勧進僧の名を記したものが少くない。そうした勧進僧を除外して、勧進ということの実態を究明することができないと思うが、従来これについて熱意を示す研究が見られなかったところ、近年に至って『中世の権力と民衆』（昭四五・六）に中ノ堂一信氏の「中世的「勧進」の形成過程」という好論文が発表され、同氏もまた今までの学界が勧進について究明することのなかったのを遺憾とし、まず平安時代から勧進聖が発生する経緯を論じ、平安時代の金石文にあらわれた勧進聖を取り上げて述べられたことは、勧進僧研究の前進として喜びにたえない。

しかし中ノ堂氏のこの論文は、俊乗坊重源の東大寺再興のための大勧進職を、勧進の歴史の上において検討し、その特色を論じられた力篇であって、重源以前の勧進の理解のために、平安時代の勧進聖に論及されたものであったが、鎌倉時代以降の金石文に見える勧進僧には及ばれなかった。（注）

（注）平安時代金石文は竹内理三博士『平安遺文、金石文篇』（昭三五・三）があるが、鎌倉時代以後はまだ一書にまとめられたものがない。写経奥書については田中塊堂博士『日本写経綜鑒』（昭二八・八）がある。

私のこの小論は、手許に集った平安時代金石文などからはじめて、鎌倉時代以降の勧進僧について一応の展望を試みたいと思う。中ノ堂氏も述べられたように、「勧進に関する研究はいちじるしくたち遅れており、未だ基礎的事実を確認せねばならない段階にある。」といってよい。その一つの試みである。

二、平安時代の勧進僧

勧進僧の名称を伴ってその名を遺品の上に記した例としては、寛治元年（一〇八七）の豊前国大野庄西明寺経筒に「観進僧遍照」と見えるも

のが古い。勧進を観進と書いた例は、筑前国有木里の元永二年（一一一九）経筒にもある。

寛治三年（一〇八九）の筑前国弘誓寺経筒の勧進僧慶源は、十七年後の長治三年（一一〇六）の筑前国四王寺経筒には願主僧慶源として見えている。四王寺は観世音寺の後山に古く存した寺で、平安時代には天台系の寺として栄え、その山中には経塚が多く営まれた。四王寺経筒に願主として見える慶源は、おそらく四王寺の僧で、同じ筑前国の弘誓寺における経塚築造の時には勧進僧として宗教活動をしたものであろう。

このように所属を推定できる僧もある反面、それの明らかでない僧の方が多い。嘉保二年（一〇九五）の京都市上京区浄土院阿弥陀如来像の胎内墨書に、「無縁僧寂能」が諸檀那を勧進して一伽藍を造立し、この仏像を安置したことを示しており、定まった寺に属さない寂能が勧進僧として尽力したことが知られる。

筑前国英彦山で出土した永久元年（一一一三）経筒は、「勧進僧厳与」によって書写供養された経を納めたものであるが、「彦御山住僧厳与」とも書き、「筑前国鞍手郡日光寺山住」とも記してあることから見ると、彼は本来彦山の僧であり、当時日光寺山に住んで勧進活動をし、彦山に経塚を築造したことが考えられる。

保安三年（一一二二）書写の法隆寺一切経の内に、「勧進法隆寺沙門五師大法師林幸」の名あるが、この勧進僧林幸は法隆寺の僧であった。このようにその寺の僧が自からの寺に関しての勧進をすることも多くの例がある。天養元年（一一四四）播磨国極楽寺において瓦経による経塚が築造されたが、それを発願し勧進したのは極楽寺別当大法師で東寺真言宗の僧禅慧であった。彼の勧進によって何人かの僧が瓦経を書写した。瓦経の銘文に「於播州極楽寺依大法主禅慧之勧進奉書写已畢」と記されている。

勧進僧に大勧進と小勧進の両者の名を連らねて記される場合がある。これは勧進僧の代表と、その下にあって実際に奔走する人のあった場合のあることを示すものである。康治元年（一一四二）に銅板経を筑前国求菩提山に納めた時の大勧進は金剛仏子頼厳、小勧進は僧勢実であった。この頼厳はこれより前の保延六年（一一四〇）にも求菩提山に経塚を営んだ時、願主として名を刻んでおり、求菩提山の僧であり、小勧進の勢実も同山の僧と考えてよいと思われる。

同じく大勧進と小勧進を併せ記した例の中で、承安元年（一一七一）八月十九日に一か所、二十八日に二か所、同じ岩代国で相前後して営ま

れた経塚では、その小勧進が共通の人たちで、大勧進は各別の僧になっている。

㈠信夫御庄天王寺

大勧進聖人僧定心、小勧進白井友包、糸井国数、藤原貞清、藤井末遠など

㈡磐瀬郡米山寺

大勧進聖人僧行祐、糸井国数、藤原貞清、白井友包、藤井末遠

㈢伊達郡平沢寺

大勧進聖人僧長胤、糸井国数、藤原貞清、白井友包、藤井末遠

小勧進と記したのは天王寺の分のみであるが、白井友包など四人の名は三例に共通しているので、彼らは在俗の地方武士層の人で、弥勒出世の暁の浄土往生の信仰に燃えて、同国の三つの郡の名寺に経塚築造を発願し、人々を勧進したもので、代表者としての大勧進をそれぞれの寺の僧に委嘱したものと解される。この場合は勧進の実体は在俗の白井友包らにあったのである。

寿永三年（一一八四）に阿波国雲辺寺の毘沙門像を造立した大願主僧願西は、同寺の千手観音像の胎内墨書銘中に、「常住聖人西行房願西が勧進」に依って造立されたことが見えるので、雲辺寺に常住の僧であることが知られる。

以上、平安時代の勧進僧について若干整理してみたが、その名称については、勧進僧がとくに多く、勧進聖人というのは保延五年（一一三九）の会津平田氏蔵の経筒に見えるものが古く、平安末期ごろから用いられはじめている。また久安四年（一一四八）の武蔵国平沢寺経筒に見えるように勧進沙門とするものもあらわれてくる。

大勧進の名称は、天承元年（一一三一）の伯耆国大山寺阿弥陀像の胎内墨書中に、「大勧進大法師隆朗」と見えるのが早い。大勧進と小勧進を併記するのは、前記の康治元年（一一四二）求菩提山銅板経が古い例である。

しかし平安時代の大勧進は勧進の代表者としての地位を示すものであって、鎌倉時代以降に見るような一つの寺の造営に関する大勧進職を指すものではない。

一般に勧進僧は諸国を遍歴して勧進活動をしたものと思われている。それは民俗学的思考によるのであるが、後世はともかく、勧進僧の出現

した早い時代にあたる平安時代の勧進僧が、広く遠隔地まで勧進のために出歩いたかどうかは疑問である。平安時代金石文について見ると、諸国遊歴勧進の事実はまだ出て来ない。

先年中村五郎氏が「大和文化研究」第十巻五号（昭四〇・五）の「岩代承安経筒銘に見える藤井氏について」という論文において、山城国花背の仁平元年（一一五一）の経塚と、前記の岩代国における承安元年（一一七一）の経塚とに密接な関係があると論じられた。それは山城花背の経塚関係の石塔婆に「那知山住僧永鑒」という僧の名が見え、岩代平沢寺の経筒にも「大檀主永鑒」の名のあるのを同一人と見、この人は熊野那智で修行した聖の一人であり、この聖の遊行を示すのがこの山城と岩代の経塚であるとされた。また岩代の米山寺経筒に見える「大勧進聖人行祐」と、承安四年（一一七四）の伊勢国菩提山瓦経の結縁者中に「僧行祐」とあるのを同一人と見て、行祐はいわゆる聖であって、岩代と伊勢に遊行の足迹をとどめているのであるとされた。一般的に勧進僧（聖）の遊行ということがしばしば述べられるが、その実例を挙げて述べられることがない。従って中村氏の右の着想は甚だ興味があるが、これについては賛成しかねる点がある。

山城での永鑒と、岩代での永鑒は二十年の年数の差がある。確かな同人でない限り、一個人の活動の年限としては幅がありすぎるし、この遠くへだたる永鑒という名は同名異人と考えるのが常識であろう。また平沢寺の行祐が大勧進聖人と記されていても、私の考では前記の通り平沢寺の僧がたのまれて勧進聖人と称したもので、この人をいわゆる聖として遊行した人とは考えられないのである。年代は接近していても、岩代の行祐は別人である。僧侶の名などは同じ名の人がいたる所にあるので、簡単に同一人と認定できない。

井上氏の所論は、勧進僧（聖）は広く全国を遊行するものとの先入観に支配されて、それに史料をあてはめようとされたが、実はこれらの史料は結合できないものである。いい代えると、それほどに古い時代の勧進僧らの遠国への遊行の実態を証明することはむつかしいのである。その行動範囲は、近畿、関東、奥羽、九州といったそれぞれの地方程度であったと思われる。

三、鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代初期に東大寺大仏殿を再興のために大勧進職という組織が設けられ、その初代の大勧進に就任したのが南無阿弥陀仏俊乗坊重源である。ついで東大寺大勧進職は栄西・行勇・円照・聖守などによって継がれて行く。こうした大きい寺の造営及び募金事務局としての大勧進職に

ついては、前記の中ノ堂一信氏の論文に注目すべき論述がある。

このような大きい固定した組織の勧進ではない一般の勧進僧を私は考えて行くことにする。

讃岐国屋島寺として知られる千光院では、鎌倉初期に梵鐘が新鋳された。勧進聖人は蓮阿弥陀仏である。その鐘銘によると、勧進聖人は「讃岐国住人沙門蓮阿弥陀仏」であり、彼は当寺の梵鐘奉鋳の願を発して、承久元年（一二一九）四月に上洛し、六条町で十方の檀那に勧進して、貞応二年（一二二三）十月に鐘は鋳造されたのである。

この人は千光院の僧ではないが、同じ讃岐の住人で、浄土教信仰の僧であったことはその名から知られる。梵鐘鋳造の費用を多くの人から募るため、京都に上って勧進した。勧進についての具体的なことが少し知られる一例である。

鎌倉時代のはじめに東大寺八幡宮に納められた大般若経は比丘尼の成阿弥陀仏が勧進したもので、その巻第一には嘉禄二年（一二二六）の奥書があって、「比丘尼成阿弥陀仏此御経勧進之根源殊以厳重……」と見え、巻五百三十二には安貞二年（一二二八）の奥書があり、「悪筆之条雖恐神慮、依聖尼勧進……」と記されている。この写経の勧進者は比丘尼であり、聖尼とよばれている。近世に勧進比丘尼（歌比丘尼）が仏教伝達のため大衆向きに活動することがあったが、この成阿弥陀仏という女性はそのような性質の勧進比丘尼ではない。

正嘉二年（一二五八）山城国鞍馬寺銅燈籠が造立された時の「勧進沙弥西蓮」は、弘長二年（一二六二）の山城国深草瑞光寺所蔵の鉄燈籠の扉にも「勧進沙弥西蓮」と見え、その二つともに藤井景光という人が助成人として名を連らねている。西蓮のような名は最も普及していて、同時代に同名異人が相当数あるのであるが、同じ助成人を伴っていることと、地理的に同一地方であることから、この二つを同人の勧進活動と知ることができるのである。同じ勧進僧の実例が二つも三つも知られる場合はきわめて少い。

藤井氏は鞍馬の奥の花背に昔から多い姓であるので、その辺の人かとも思われる。西蓮その人は所属の寺のない勧進聖として、あちらこちらの寺の金燈籠など造立のために、勧進して歩いたのであろう。

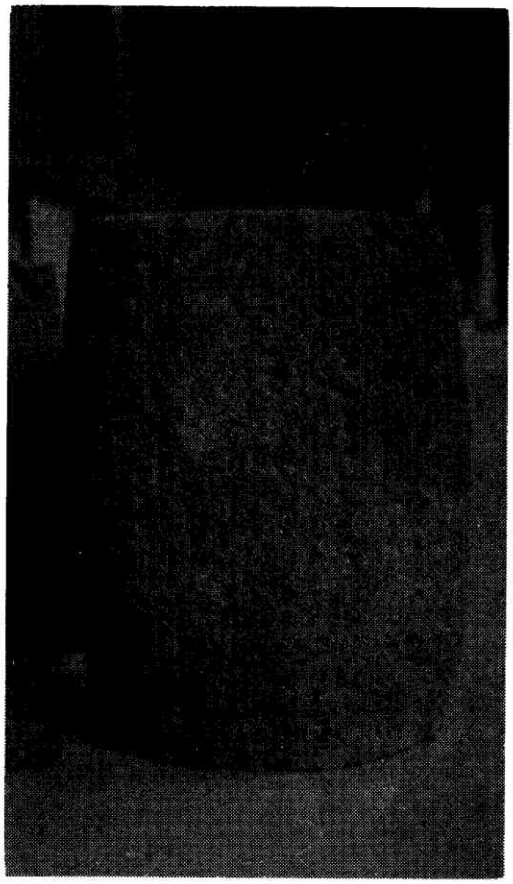
大和国吉野山金峰山寺蔵王堂に古く存した文永元年（一二六四）の梵鐘には、「勧進聖河内国住人僧実円」とあったという。河内国に住んだ勧進聖が大和国の寺のために勧進をしたのである。

正応五年（一二九二）山城国木津の惣墓に、墓地の供養塔として大きい五輪石塔が建立され、春秋二季の彼岸に廻向されることが銘文に刻ま

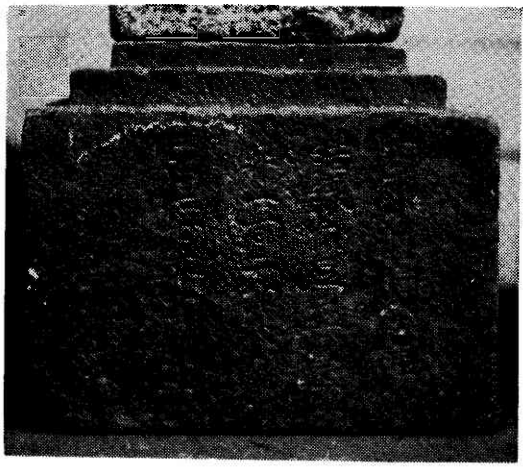
れたが、この作善を勧進したのは、特別の勧進僧の名を出さず、銘文中に「和泉木津僧衆等二十二人同心合力、勧進五郷甲乙諸人造立之」と記している。この土地の僧二十二人が勧進僧となって、五か村の多くの人から勧進したのであって、土地の僧たちと住民との結びつきを示す資料である。

大和国の東部山間の都祁の牟山（むやま）という地に、牟山隠士西念という人があった。同地の都祁水分（つげみくまり）神社にもとあった石燈籠の刻銘によると、永仁三年（一二九五）に「勧進西念」が結縁人数四百五十余人を勧進して石燈籠を造立した。ついで正安三年（一三〇一）の旱天にあたって、西念は春日山の高山（こうぜん）社に七か日断食参籠して降雨を祈ったのであるが、その時石造の宝塔を造立し多くの結縁の人たちを勧進した。その石塔の塔身（**第一図**）のみ、今も春日大社宝物館に保存され、「勧進沙門西念」の名も見える。都祁来迎寺の元禄縁起に「西念坊ハ元来牟山隠士、常ニ詣室生山竜穴……祈雨忽得其妙僧也」と記している。この西念の如きも大和東部山間に住んで、その付近に勧進活動をしているのである。

永仁七年（一二九九）に紀伊国高野山では「勧進仏子願阿」が尼乗台並びに一百二十人を結縁衆として一千日別時念仏を行い、その宝篋印塔を奥院に建立した。この資料は昭和三十七年の奥院燈籠堂の土壇整地によって多数発見されたものの一つで、宝篋印塔の基礎のみが残っている。（**第二図**）高野山には念仏聖の居所が別所として谷々にあったが、この勧進僧願阿はその名からしても弥陀信仰の念仏聖であったと考えられる。いわゆる高野聖で、多くの人を勧進してこの石塔を建てたのであるが、結縁衆をどの地方に求めたのかは明らかでない。



第一図　西念祈雨宝塔々身



第二図　高野山奥院出土基礎

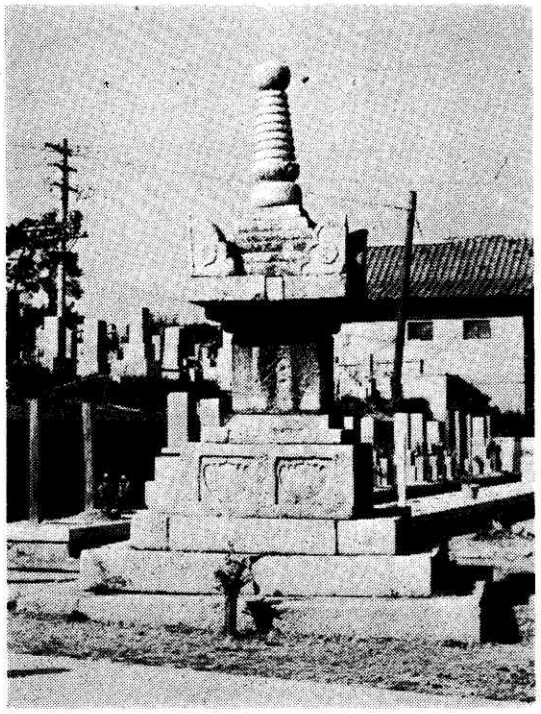
今は大津市に編入されたが、近江国比良山地西側の葛川谷（かつらがわ）には比叡山無動寺の別院道場としての明王院が平安時代に開かれて今日に至っている。その境内に立つ正和元年（一三一二）の宝篋印塔の刻銘には「四村念仏講衆等敬白、常住頼玄」とあり、また嘉暦三年（一三二八）の宝塔では「常住不動金剛頼玄、念仏講惣衆等敬白」とある。ここに見える頼玄というのは、不動明王を本尊とする明王院の常住僧で、明王院中興の僧として仰がれ、本堂の西北に頼玄をまつる小祠がある。これらの石塔は葛川の念仏講の結衆によって造立されたもので、明王院常住の頼玄が勧進しての作善であった。明王院は不動明王の霊場であるが、村人たちの信仰結衆は念仏信仰によるものであり、葛川谷の人々の信仰は明王院を護持すると同時に、天台念仏を日常のものとし、その信仰の推進に明王院常住僧が中心的役割りを果たしていたことを、これら石塔と刻銘が物語っている。

女性の勧進聖については前に述べたが、元応元年（一三一九）の近江国下羽田の劔神社石燈籠にも「勧進聖比丘尼生阿弥陀仏」というのが見える。

元亨三年（一三二三）に石大工行経の手で彫刻された紀伊国藤白峠の地蔵峯寺の地蔵石仏は、「勧進聖楊柳山沙門心静」の勧進によって造立されたのである。この楊柳山というのは、地蔵峯寺の所在地からは東北八キロ足らずの海草郡東山東村黒岩に古く存した楊柳山宝福院とも称した宝光寺という真言宗の寺で、心浄はこの寺の僧であった。彼は多くの人を勧進して、楊柳山から遠くないこの藤白峠に地蔵の大石仏を安置して、熊野街道を往還する人たちに礼拝せしめたのである。

相模国鎌倉光明寺裏山のヤグラ内に安置されていた正中二年（一三二五）造立の地蔵石仏は、近年光明寺内に移坐された。像背の刻銘によると「勧進聖尚養寺常住西蓮」とある。鎌倉付近の住僧であろう。

南北朝時代に入って、播磨国垂水の遊女塚と俗称される宝篋印塔は現在神戸



第三図　遊女塚宝篋印塔

市垂水区仲田一丁目に移されているが、建武四年（一三三七）に造立されたもので「勧進士忠禅師」と見える。（**第三図**）この士忠禅師は、暦応四年（一三四一）近くの名谷猿倉峠に、先師頼厳の三十三年供養の小宝篋印塔を建てた。また同じ名谷の明王寺にある小宝篋印塔に、「辛卯十一月十三、士忠禅師百日」の刻銘がある。これは暦応四年の頼厳石塔を建てて後の観応二年（一三五一）辛卯にあたり、この年士忠は入寂したのである。おそらく明王寺の僧で、勧進の事にたずさわったものであろう。川辺賢武氏の努力によって、士忠という僧の輪郭が右の如く判明したが、このような資料が三つも知られる例はむしろ珍しい。（注）

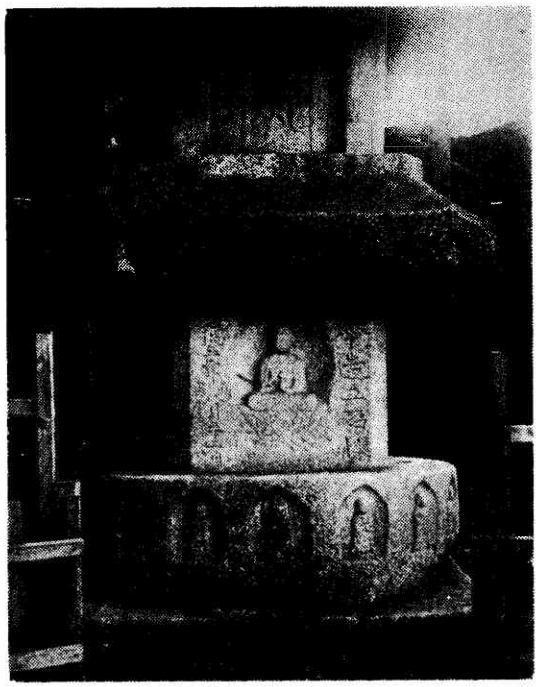
（注）川辺賢武氏「神戸の石造遺品」（昭四六・三）

暦応三年（一三四〇）に摂津国多田院で造立された石燈籠は、「勧進聖教尊」の勧進によるもので、多田院は大和国西大寺の末寺であった。教尊という名が西大寺叡尊を連想するように、この人は西大寺に属した人らしく思われる。

洛北船岡に近く引接寺という寺があり、古くから閻魔堂の名で都人に親しまれていた。康暦元年（一三七九）この寺の梵鐘が「勧進円阿弥陀仏」によって造立され、さらに七年後の至徳三年（一三八六）に、同寺境内に裳層（もこし）つきの九重石塔（**第四図**）が建立され、その刻銘に「勧進聖円阿」と見える。円阿弥陀仏を略称して円阿と称したもので、これは同じ勧進聖によって引接寺の梵鐘や石塔の造立が進められたわけで、その寺の僧ではない勧進聖が何年かにわたって、同じ寺のため勧進活動をした例として注意される。

現在大垣市赤坂町明星輪寺にある梵鐘は、もと同じ美濃国東端の御嵩の蔵王権現の鐘で、明徳四年（一三九三）に鋳造されたものである。「勧進聖江州犬上郡西郡千手院慶淳」とあって、彦根の千手院の僧が勧進聖となり、約九〇キロをへだてた御嵩の霊場の鐘のために勧進したのである。

奈良県山辺郡山添村水間（みま）の八幡神社にある鰐口は、永享十一年（一四三九）に同国の法隆寺天満宮のために造られたものが流出したのである



第四図 引接寺九重石塔

が、「勧進神主国満」とある。それは法隆寺天満宮の神主が勧進したものと思われる。勧進僧だけでなく勧進神主もあり得るが、神主の場合は奉仕する社のための勧進と解される。

文明十年（一四七八）洛東清水寺の梵鐘が鋳造された。その銘文中に二度南無阿弥陀仏の名号があらわされ、弥陀信仰を強調している。「大勧進願阿上人」は、この巨鐘奉鋳のため奔走したのである。ところがこの勧進聖の願阿は、これより十七年前の寛正二年（一四六一）に京洛で難民救済に活躍した。前年末から襲うた飢饉のために、諸国の者が京都に流入して餓死する者数を知らぬ有様であった。この時に願阿は二月二日に六角堂の前一町にわたって仮屋を作り、弟子たちに命じて病民をここに収容した。この施設は二月末日で撤去したが、この救済は世人の賞讃するところであった。

願阿は越中国の人で、家は代々漁業と養蚕業を行って来たが、彼は殺生の報いあるを悟って出家修行し、往生極楽の信仰に入ったのである。仏堂草庵の荒廃を見ればこれを修理し、また五条大橋（今の松原橋）が久しく絶えていたのを、人々を勧進して復興したという。以上の願阿の事蹟は、幸にして東福寺の太極蔵主の日記『碧山日録』に書かれている。この勧進聖は何人かの弟子をひきいて作善に従事したのである。近世の勧進聖のややくわしい実態をこの人を通じてうかがうことができる。

姫路市勝瑞寺現存の梵鐘は、もと播磨国広峰神社の鐘として、明応六年（一四九七）に鋳造されたもので、「勧進沙門江州高島郡住浄心」と見える。近江国北辺の勧進聖が約九〇キロをへだてた播磨の名社のために活動しているのである。

能登国下時国の岩倉山上に建つ岩倉寺に、黒漆塗の高さ一メートル余の棟札が保存されている。（**第五図**）永正四年（一五〇七）の本堂再興の

第五図　岩倉寺棟札

ことと、寄進者の奉加帳が陰刻してある。それによると去る明応九年（一五〇〇）中冬七日の火災に御堂悉く焼失したので、大伽藍一宇と本尊千手千眼観音像を再興、大旦那温井藤八郎統永、当別当快円、「勧進沙門奥州相津山郡岩崎寺窪空真」とある。これは遠く奥州の勧進僧空真が能登北端で活動しているのである。岩崎は福島県喜多方市に編入された旧耶麻郡岩月村の地である。この棟札によって空真が最高三貫三百文、最低一貫文を二十二人の村人や信者から集めていることが知られる。これも近世の勧進の実態が知られる資料として注目される。

以上は鎌倉時代から室町時代に及ぶいくつかの例を一覧したのであるが、平安時代とはちがって中世においては勧進僧は各地に見られるようになる。行動地域もだんだん広くなっているらしいが、そのことの明らかな例は余り多くない。大体は近国または居住地付近で勧進活動をする勧進僧が普通であったように思われる。

四、結　　語

長年の間に手許にたまった勧進僧に関する金石文を通じて、勧進僧（聖）の実態がどこまで浮び上ってくるものがあるか整理してみようとした。その資料を全部挙げると、ほとんどは単に勧進僧某という名を列記するにひとしいことになりかねない。そこで少しでもこの資料によって何かをつかみ出せるものにしぼった。

時代順に見て行くことが、歴史としての理解に便であるためにその順に述べたので、やむなく羅列的なものになってしまった。しかしこれは整理の階段を見てもらうためには必要なことでもあると思っている。

従来の書物や論文には、著名な僧侶や聖たちの諸国遍歴、勧進が随分はっきり書かれているが、金石文にあらわれた勧進僧はそんなにはっきりする所まで行かない。今後資料が増えていくぶんは明確さが進むと思うが、余り期待できないかもわからぬ。しかし打ちすててておくことはできない。遅々として進まぬであろうが、遺物の存在に支えられる強味がある。

この程度までしかわからぬというのも、歴史の一つの認識である。多くの勧進聖が全国をやすやすと遊行して、各地に勧進活動したというのは、きわめて近世江戸時代ごろのことで、それを古代や中世に適用できるかどうか、少なからず疑問を持っているのが私の現状である。

平安時代以降の仏寺の多くは、国家や大貴族に依存することが困難になり、多くの方面から経済的寄進を事あるごとに求める必要が生じ、そ

こに勧進が本来の仏教入信をすすめる意味から前進して、経済的行為が付随するものに変化して来た。

その勧進にあたる勧進僧は、その寺の住僧である場合がはじめは普通であったであろうが、第三者の地位にある僧が勧進に従事することがはじまってくる。勧進事務に没頭する人の必要から、こうした勧進僧が生まれる。平安・鎌倉時代の勧進僧もこのたぐいではあるが、多くの人はある勧進事業が終れば、もとの普通の僧としての地位に戻るのではなかったろうか。遺物に出てくる勧進僧は余りに一回限りが多いので、このように考えたくなる。まれに鞍馬寺銅燈籠など二点に見える勧進沙弥西蓮でも、それを生活の資にするほどの専門職能的な勧進僧であったかどうかわからない。

南北朝末期の近江国彦根の勧進聖が美濃国東端へ出かけていること、室町中期の越前国の聖が京洛で活動すること、近江国高島の聖が播磨におもむくこと、さらに奥州の勧進僧が能登国に来ていること、このような例が室町時代から目立つのは、全国とはいえなくとも、かなり広い地域にわたって職能的な勧進僧として遍歴する事実があったことを考えさせるもので、それは勧進僧の近世的様相であるように思われるのである。

（昭和四六年八月）